

会報

静岡県公立高等学校
PTA会長連絡会



明るい四十一年度

県公立高校PTA会長連絡会

会長 志田勝次郎

昭和四十年度の終幕が將に降り
様として居ります。この年度は何
かと忙しく過ぎて了った感じが致
します。然しそのどれもが苦難の
時代であったにしても明日の希望
が持てる事柄であった様にも考え
られます。嘱望された四十年は結
果から申しますと鍛練の時代であ
ったのかも知れません。やがて四
十一年度ともなりますれば実を結
ぶ年度となつて行く様に思われ
てなりません。

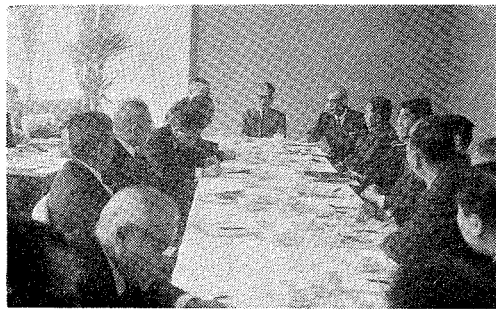
の問題も最低の時代を越して、よ
うやく望みの持てる時節を迎える
事が出来る様な気が致します。P
T Aが本来の仕事に没頭出来て、
教職員の良識に尊敬の念を以つ
て、相たづさえて子弟の教育の向
上を計つて行かれる新しい時代
の幕が開かれる事を期待する年度
が私達を待つて居てくれそうな気
が致します。

かう年も又、旅人であろうかと考
えても凡俗には仲々に心にしみる
思いが深く、万感交々に到りて已
が心を救うことが出来ません。各
会長様が年々、味う卒業式の一
と共にこの年度末の感慨はくり返
えしくり返えしやうて来る年中行
事とは申せ、私の心にとつては毎
年新らしい、悩みとなつて立ちの
ぼつて参ります。

最も不適任である私に、今年度
も大過なく送らせて頂いた、各会
長様方の御好意に對して云い尽す
ことの出来ない感謝をこめて、お
札を申し上げます、と共に事務局
の心からの御援助と御尽力に對し
て深く頭の下る思いがしてなりま
せん。明るい四十一年の開幕を祈
つて止みません。有難う御座居ま
す。

目次

- 一、明るい四十一年度 会長 志田勝次郎..... 1
- 二、昭和40年度 高P連のあゆみ..... 1
- 三、吉原高校生活館について..... 2
- 四、特殊学校教育設備 助成運動..... 3
- 五、第3回研修記録..... 4
- 六、世界の宇宙開発競争と日本の現状について..... 2
- 七、宇宙開発の目的 宇宙開発競争..... 1
- 八、日本の実情..... 2
- 九、理事会報告..... 10
- 十、ベルマークを集める運動 役員改選について..... 10
- 十一、その他 編集後記..... 10



〔盛会有意義だった1月18日の理事会〕

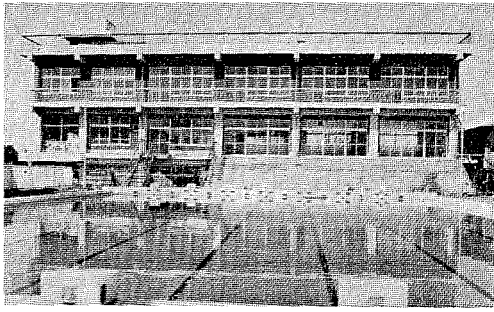
昭和40年度 高P連のあゆみ (前号に続く)

- 11・14 地区別協議会補助金送付 県下高P十一ブロックに 分け、各地区毎に1~3 月の間に協議会を開く
- 1・18 理事会開催(於日興会館) 各地区協議会等の情況報 告及意見交換
- 3・31 大学入学者急増対策 第3回研修会計画につい て

- 2・19 ベルマークにつき助成会 本部と打合
- 3・3 高校教育行政の適正化に つき要望書を当局に提出
- 3・30 理事会(於県民会館) 各地区協議会の状況報告 第3回研修会及び協議会 の事後処理について
- 2・18 第43回全国高P理事会 (於東京河井事務局長出 席)
- 2・4 特殊学校教育設備助成、 ベルマーク収集協力方に つき依頼状発送
- 1・27 第2回欧州教育事情視察 団参加希望者募集
- 2・2 講演後協議会にうつり、 高校教育行政の適正化に つき要望並にベルマーク 運動推進につき決議
- 2・2 本会の現状について (NHK解説委員村野賢 哉講師)
- 1・20 第2回研修会(期待され る人間像)記録発行
- 2・2 第3回研修会(於中小企 業会館) 世界の宇宙開発事情と日 本の現状について
- 3・31 特殊学校施設援助ベルマ ーク運動について
- その他 (役員多数出席盛會且有 意義に終了)

生活館について

吉原高校PTA会長 今泉 勇
同後援会長 今泉 勇



〔生活館全景〕

現在青少年の「しつけ」が問題とされているが、社会の中で円滑に生活してゆかために望ましい習慣を生徒の身につけさせてやることは、必要欠くべからざるものである。

家庭にあつては親が、学校にあつては教師が、社会にあつては年長者が、子供の発育段階に応じてその周囲の社会に自然に入り込めるよう方向づけ習慣づけることが大切である。しかし、とかく子供の自発性を尊重するのあまり、「しつけ」は無用のもののような

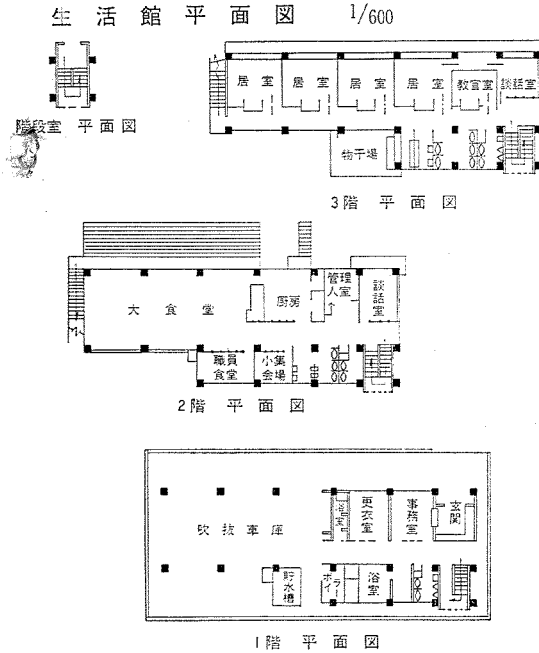
錯覚に陥り、望ましい習慣形成の指導が、家庭でも学校でも社会でも疎そかにされがちではなかつたらうか。

学校に於ては、家庭で行なわれた「しつけ」の上に立って、特に「公共生活に於ける節度ある行動」「望ましい人間関係」形成への誘導を重点に指導しなければならぬと思う。また学校のあらゆる機能と場を動員して、一貫性のある指導のもとに、過去のよい習慣の助長、望ましくない型の除去

をはかり、その人間関係の円滑化と公共生活に於ける節度ある行動を形成し得るよう努力を傾注しなければならぬ。

このような意味で、個人差に依じたきめのこまかい教育、望ましい習慣形成などを目的として二四時間の生活実践を通じて、生活の基本的態度の育成の場とする生活館の建設について、学校より強い要望があり、後援会もうって一丸となつてこれが建設にふみきり、四十年十一月十五日鉄筋コンクリート三階建のしよ洒な生活館の完成を見ることができ、二十四時間教育の第一歩を踏み出すことができた。

生活館の目標は、



工事概要

1. 設計監督 白井建築設計事務所
2. 施工 建築給配水 (株) 保坂組
電気 大光電気 (株)
3. 着工 昭和40年5月19日
竣工 昭和40年10月15日
4. 建築延面積 839.3㎡ (253坪)
 - 1階 玄関、事務室、更衣室、便所、大浴室、小浴室、ボイラー室、吹抜車庫
 - 2階 談話室、管理入室、厨房、便所 2. 化粧室、小集会室、大食堂、職員食堂
 - 3階 談話室、監督教官室、居室 4. 便所 2. 洗面室、物干場
5. 工事費 ¥27,281,000円

内訳	新築工事	24,650,000円	} 寄付金
	電気工事	14,400,000円	
	設計委託	1,191,000円	

- 1、節度ある生活態度の育成
 - 2、望ましい人間関係の育成
 - 3、人間の価値の追求の場とし、これ等を具現するために、生活信条として次の五つを挙げ、ことあるごとに朗誦をさせながら、日常生活に於ても心のよりどころとしている。
- 生活信条
- 1、礼儀
 - 2、友愛
 - 3、規律
 - 4、自主
 - 5、秩序
- 以上を朗誦形態として、次のようにしている。
- 一つ、礼儀正しく互に尊敬しあいましよう
 - 一つ、けじめある行動をしましよう
 - 一つ、友情を育てましよう
 - 一つ、責任ある自主的行動をいたしまししよう
 - 一つ、秩序を正し環境をととのえましよう
- 以上生活館の概要を紹介致しましたが、皆様の御批判と御指導を願ひします。



〔東京朝日ビル教育助成会ベルマーク整理現場〕

特殊学校教育設備助成運動

— 恵まれぬ子にも愛の手を —

或母の手記

「身障者の子どもたちも存在するといっただけでなく、夢のある人生を持たしてやりたいのです。国が県がという前に親の私たちのさざやかな集りで子どもたちのしあわせを考えて行くのではありませぬか。私たち学校へ付添ってくるお母さんたちはかねがね考えていた将来の施設設立のために、ささやかながら貯金をはじめました。……私たちは一日も早く希望がかなえられ、子どもたちの明るい笑顔の流れてくる日のことを思いはげんで居ります。」

これは、本会組織体の一メンバーである県立静岡養護学校のPTA会報第1号に掲載された。私達の願い 付添の母を代表してと題する或母の切なる悲願であった。

愛し子思ふ親心
親よと慕う子心を
うつしてひろく人の上
あふるる愛に世はぬくむ

母の詩にあるように、県下一千人に及ぶ盲、聾、身障者生徒を思う生みの母の親心を、県下九万人に及ぶ高校生親たちにもうつしてひろく愛の手をとの声が次第にもりあがってきた。

ベルマークを集めよう

一月十八日の理事会にもこの問題がとりあげられ、二月二日の第三回研修会の際、開かれた協議会で提案され、特殊学校教育設備助成運動のため、ベルマークを集めることに満場一致で決定されたのであった。

高P連事務局としては、県下の特殊学校施設をみてまわり、PTA会員の少いため、普通高校の二十分の一にも足りないPTA会費総額で、しかも学習には普通高校

昭和40年12月14日

静岡県特殊学校
PTA連合会長
天部 清

要望書

特殊教育も社会の進展に即して年とともに進歩して来ましたが、不幸な子を持つ私共にとつて何物にも換えがたい喜びであり、御理解と御努力の結果で、厚く感謝するところであります。

さて、特殊教育の幅も広まり、教育内容も変化し将来の職業的自立につきましても、ケースバイケースによることが多いこの教育で

に必要な特殊学習施設に莫大な経費を要することを目的あたりみて、今更のように教育設備助成運動の急務を痛感させられたのであった。

教育設備助成会

既に一般には、昭和35年10月に財団法人教育設備助成会が朝日新聞社の全面的な後援のもとに発足し、協賛会社55、協力会社15、参加PTA一三、三八五、世帯数八一八八、六四五、全国学校の30%が参加、これまでに約二億円の教育設備購入費が得られているというところである。

しかし、これは従来ベルマークを集めて自分の子どもに学校への助成と、へき地学校の教育設備助成にあてられていたのである。

特殊学校へ新例

本県の特殊学校においてもこの運動に参加し、二年を経過しても小人数のPTAでは僅か一万円位しか集らぬ貧弱な現状をなげいて

は、きめの細かい学習が必要となり、これに伴ない施設、設備についても一般教育以上に種々要求されるのであります。PTAの組織も今や全国的組織（全国特殊学校PTA連合会）にまで発展し、各地の様子を知るにつけ、本県の現状を今一歩前進させていざだきたく、ここに要望する次第であります。

要望事項

教材、教具の充実
教育の近代化のために、特設学級設備、視聴覚、体育関係用具等について特に御配慮願います。

以下略
いる折からでもあり、新例を開くことになるかも知れないが、本県公立高校P連の決議の趣旨を東京に本部をもつ教育設備助成会に説明し、了解と支援を求めたところ左のような方法によって実践することを欣然として承諾支持されることになったので、この旨県下各高校PTA、及び校長協会側にも連絡し、協力をお願いした。

記

- 一、各高校PTAは生徒にも協力をもとめて商品についている証券（マーク）を集め、静岡市追手町県民会館内静岡県高P連事務局へ送ること。
- 二、県高校P連はこの証券を一括して、特殊学校PTA連合会へおくる。
- 三、特殊学校PTA連合会では、関係各校と協議の上、この証券を適当に分配する。
- 四、分配をうけた各校では、これを整理し、各協賛会社別の台紙または袋に入れ、東京都中央区

銀座西六の三朝日新聞東京本社銀座別館（朝日ビル）三階教育助成会（TEL522）四九三三七（四九三八）へ送付すること。
— この後の備品購入までの手順については助成会より指示をうける。

続々協力の反響あらわる

ベルマークを集めよう——の運動は、朝日新聞紙上にも二回にわたって紹介され、続々と協力の反響があらわれ、県高P連事務局にベルマークがとけられてきた。

県下高校では、静岡商業がトップをきり、生徒会の申し合せと実践により、たくさんの証券がとけられ、つづいて、静岡城北高校、磐田商業高校、静岡市立高校、裾野高校、島田高校、稲取高校、沼津市斉藤嘉久、静岡市山本静江、無記名二名など、次々と持込まれて本部の人々をよるこぼせたが中には高校以外の小学生や、一般市民からも新聞紙上で知ったからといってまごころのこもった切抜のベルマークが郵送され、感激させられたのであった。

期待

ベルマークを受けとる千余名の特殊学校生徒のしあわせはいまでもないが、うっかりしてすてられていたベルマークをきりとりて恵れぬ子に、まだ見ぬ友にあたえそのしあわせを祈る実践から体得する助けあいの尊い愛の心が、県下九万の高校生と、これを取りまくPTAの中に、ほろほろとしてわきおこるとき、高P連の組織も生かされて、情操ゆたかな社会基盤が培われるであろうことを期待して止まない。

世界の宇宙開発競争と 日本の現状について

—講演速記—



村野賢哉講師

NHK解説委員

村野賢哉

第三回研修会が二月二日、静岡市追手町中小企業会館において開催された。人類が夢想だに及ばなかった月旅行への宇宙科学の驚異的發展に世界の注目をあびている折から、本会においてもNHK解説委員村野賢哉氏を迎え、世界の宇宙開発競争と日本の現状と題してスライドを見せてもらいながら、その豊富なる蓄をかたむけての名講演をうかがい参会者に多大の感動をあたえられ非常に啓発された。この講演の中に予告されたソ連ルナー9号がその直後、はじめて月の軟着陸に成功したというニュースは世界をおどろかせ、当時この研修会に参加した方々の感慨もひとしおであったであろう。高P連会報5号発行にあたり、紙面の都合上、速記の一部を掲載したが、特に第一回の研修オリンピックの講演においても、今回の研修宇宙開発の講演の中にも、はげしい国際競争に「追いつき追いこす」実績の具現はアメリカの例をみても、為政者の真剣な政治施策の姿勢と熱意にあることがうかがわれ、痛感させられた次第である。

一、宇宙開発の目的……………	5	抑止戦力……………	7
二、その發展史と開発競争……………	5	实用目的の宇宙開発……………	7
石火矢……………	5	月旅行……………	8
V二号の出現……………	5	ルナー九号の打上げと難関……………	8
ドイツから技術者を連れ帰る……………	5	——中略——	
米・ソのロケットのはじまり……………	5	三、日本の宇宙開発……………	8
アメリカの宇宙開発をつかさどる人々……………	5	個体燃料と取組む日本の特色……………	8
ワ・コープラー……………	5	フランスから日本へ申入れ……………	8
ソ連大陸間弾道弾の実験成功……………	5	中共も日本に注目……………	8
人工衛星第一号の打ち上げ……………	6	スパイされる日本の科学……………	8
ミサイルギャップに米国の奮起 宇宙科学陣……………	6	ロケットの商品化競争……………	9
基礎教育に理科重視……………	6	抑えられていた西ドイツ……………	9
テレビ活用による理科教員の養成……………	6	若い日本の技術者……………	9
各大学にテレビ講座……………	6	米・ソに次いで日本は第三位……………	9
ケネディの掛声「ソ連に追いつけ、追いこせ」……………	7	若い人々その研究熱……………	9
巨大な軍事費……………	7	◎愛国科学者日本人織田助教……………	9
将来は宇宙開発産業時代……………	7	頭脳の流出から復帰へ……………	10
ミサイルギャップの逆転……………	7	日本の将来に期待する……………	10
ポアリス原子力潜水艇の威力……………	7		

一、宇宙開発の目的

宇宙開発と申しますと、いろいろございますけれども、人間が宇宙旅行をするというのも、一つの目的でございますし、そもそもは、軍事目的からこれが始まりましたことは、ごそんじの通りでございます。

二、その発展史と開発競争

石 火 矢

軍事目的に一番最初に使われましたのは、もちろん、古い昔の中国で例の石飛矢というようなものから、ロケットの原型みたいなものが始まったことは、ごそんじの通りなんです。

V 二号出現

最も、近代戦争に使われましたのは、第二次大戦中のドイツのV二号というロケットでございます。これが軍事用に実用化したしました、最初の最も大規模なロケットと、考えていいんじゃないかと思えます。このV二号は、長さがだいたい一四mぐらいございます。現在も、かなりこのV二号と、そう大差のないロケットが、活躍しているのでございます。このV二号の出現というものが、今日の宇宙開発の大きな原因になったということが、いえるかと思えます。これは長さが一四mからもございます、大体三〇〇kmの射程をもっておったのでございます。そしてオランダの首都のハーグから、ロンドン、その他を目がけて打ち込んだのでございますが、これが、第二

次大戦中、大体、千発ほど打ち込まれまして、その内半分が、ロンドン、あるいは、その近郊に命中したと言われております。

ソ連から技術者を連れ帰る

その後、第二次大戦が終わりました時、やはり千発近く残骸その他が残っておりまして、アメリカとソビエトが、それぞれそれを持ち帰ったということも、歴史上の事実でございます。技術者あるいは科学者も時に、ソビエト、アメリカが、これを連れてまいりまして、両国の今日の宇宙開発のスタートは、このV二号からきられたといつても、過言ではございません。

米ソのロケットのはじまり

もちろん、ソビエトが、よく自慢にいたします、チオロコフスキーという人が、このロケットの原理を、近代的なロケット、特に燃料に液体燃料を使いました近代的ロケットの原理を発表して、すでに一〇〇年になります、このチオロコフスキーが、世界で最初だということ、ソビエトが自慢にしております。又アメリカが、このV二号の出現以前に、ゴダードという人が、やはり液体燃料を使ったロケットを始めて飛ばしまして、これが、最初に近代ロケットを飛ばした世界最初であると、こんどはアメリカが自慢いたしておりますが、いずれにいたしましても、しかし、実用になりましたのは、V二号が、最初でございます。

アメリカの宇宙開発を

つかさどる人々

時に、アメリカの今日の宇宙開発の大立物になっておる人達は、このドイツから連れて来た人達でありまして、バルト海沿いに、ペーネンミュンデルというところがございます。ここに、ロケットの研究所がございまして、有力な技術者、科学者はここに集っていたのでございます。その中の一人、ウェルナー・フォン・ブrawnというロケットの神様といわれる人がおりますが、これが今、アメリカの宇宙開発、特に人間を月に送りこむ為の大型ロケット開発のリーダーになっているのでございます。約八〇〇人のこのロケット関係の技術者が、第二次大戦後、アメリカに連れてまいりました。V二号もいろいろかき集めまして、アメリカで約八〇〇組み立てました。現在は約四〇〇人のドイツ人が、アメリカに帰化したしまして、アメリカのロケット開発の中心人物になっております。アメリカはその一〇〇発分のV二号を、盛んに打ち上げまして、実験を重ねました。

W・コープラル

その内、アメリカ独自で作りましたロケットも、W・コープラルというのがございます。これは、フォン・カルマンという人が、アメリカ、ロサンゼルス郊外にあります、カリフォルニア工科大学の教授だった人ですが、この方が中心になって、W・コープラルというロケット

を作りました。が、これは後にV二号の二段目につけることになりました。今日アメリカが大型のロケットを開発して、人工衛星を打ち上げておりますが、その一段目のロケットは、大体、このV二号と同型、あるいは、それを少し大きくした。あるいは、それをたばねて使っていると、いうことでございます。その後、もちろん、大変に進歩したロケットがございまして、いぜんとしてこのV二号が、現在のロケット界で大活躍をしているということ、まぎれもない事実でございます。

ソ連大陸弾導弾の成功

ただ、アメリカがこのV二号に終始いたしました為に、それほどの大型ロケットの開発というところまで、いかなかつたのですが、ソビエトの方には、これも伝えられる、やや伝説的になっておりますけど、ドイツがすでに計画しておりました、二段式の大型ロケット、この設計図をソビエトの方が手に入れたということが、伝えられております。それをもとにして、非常に大型なロケットの開発に進んでいった、ソビエトがアメリカより先に大型ロケットの開発に成功したのは、実は、このドイツのペーネン・ミュンデルのロケット研究所にあった二段式大型ロケットの設計図が手に入ったからだという、言い伝えがございまして、ソビエトの公式発言では、これはすべて否定されておりますけれども、一般にそう信じられているのでございます。このよう

に軍事目的からスタートいたしましたし、そしてソビエトが、一九五七年の八月に大陸間弾道弾の実験に成功いたしました。大陸間弾道弾と申しますと、大体、八、〇〇〇km〜一〇、〇〇〇km飛んで、その上に原水爆を積むものでございます。アメリカは、それより大分遅れます。

人工衛星第一号の打ち上げ

ソビエトは、この大陸間弾道弾の成功から、約二ヶ月立ちました。その一九五七年の十月の四日に例のスパートニク第一号、人工衛星第一号を打ち上げたのでございます。

ミサイルギャップに

米国の大奮起

ここで、アメリカは完全にソビエトに抜かれたというのに気がつきまして、当時、しきりに、スペースギャップ、ミサイルギャップあるいはスペースギャップということがいわれまして、て当時のアイゼンハワー大統領は、このソビエトに宇宙開発の面で何故遅れをとったかということ、真剣に討議いたしました。結局は、アメリカの理工科系の基礎教育が非常に劣っていたということに気がつきまして、ごそんじのように、大統領の科学特別補佐官、科学顧問としてMITの学長であったキリアン博士を、アイゼンハワーの科学顧問とした訳です。大統領府の中に、科学局、科学技術局といっ

作りまして、その下に宇宙開発、今のアメリカの航空宇宙局と呼んでおりますが、航空宇宙局、それからアメリカの原子力委員会、それから一般科学、あのサイエンス・ファンデーションというのを作りました。こういうものを配下に置きまして科学技術局のようなものを、大統領府に置きまして、その責任者としてこの大統領の科学顧問を置いた訳です。

基礎教育に理科重視

そこで最初に掲げられましたのが、この一般基礎教育の問題がございまして、特に、アメリカが遅れをとったのは、中学、高校でございまして。このハイスクールにおける理工科系特に、物理、化学、数学といった硬派の理科の教育が、基礎教育が非常に遅れているということが叫ばれました。私、七年ほど前にまいりました時に、科学アカデミーにもまいりまして、いろいろ話を聞きましたが、その時に結局、その原因といわれたのは、これは今の日本の学校制度も同じなんです。すべて選択制になっている、課目と同じ理科系の学科の中でも物理、化学必ずしも必修でもないというような面があつて、どうも軟派というところよつと語弊がありますが、生物系統を扱するものが多かったです。それから、先生も産業界がはでになってまいりますと、理工科系の先生が学校に残らない。段々民間の産業界に高給をもつて出ていってしまうというようなことで、理科系の先生も、女の先生が多くなつてきてしまつた。そういう

ようなことから、ついでとも物理、化学というような物よりも、生物系統の方に、高等学校の理科教育が重点をおくようになってしまった。それが一つの原因とも考えられる。

テレビ活用による

理科科教員養成

特に、物理、化学の教員が足りないということが叫ばれまして、全米の理科教員大会でございまして。教職員大会みたいなものですが、そこで決議がなされまして、急速に、物理、化学系統の高等学校の教員を養成すべきである、という決議がなされまして、その一つの方法が、テレビジョンを使つての先生の養成講座だったんでございまして。私も七年前にまいりました時、その番組を見まして非常に感心をいたしました。帰つてきて、さつそく日本に輸入をいたしました。当時私が科学教育部というところを預つておりました時に、コンチネンタル・クラブルーム・大陸教室とアメリカで呼んでいますが、その第一シリーズの原子力時代の物理学というのをNHKの総合テレビ並びに教育テレビで、二年半ほどやりましたことがございましたが、これは、三十分の最初は物理、二年目は、化学をやつたんですが、物理の講座をやりまして、これは三十分づつ毎朝やる訳です。月曜から金曜まで、六時三〇分から七時まででございまして、これをアメリカの全米の大学、約三〇〇いくつがこの講座を自分の大学の物理学講座にとり入れる

ということを声明いたしました。その参加を声明いたしました大学に、聴視者は登録する訳です。もちろん授業料は払うんですけど、たとえば、カリフォルニア大学の物理学部に入学すると、但し講義はすべてテレビで済ます訳でございまして。

各大学にテレビ講座

各大学にテレビ講座の専任の教授を置きまして、週一回、金曜日の夜大学に集まりまして、一種のスクーリングみたいなことをやりまして、一年間を二期に分けてまして、それぞれ試験をいたします。二回の試験に合格したものに、カリフォルニア大学物理学部のクレジットを出した訳でございまして。これは全米三〇〇いくつかの大学がみんなそれをやりまして第一年で三、〇〇〇人の物理学の教師を生んだ訳でございまして。これは、どういう方法をとるかといいますが、既に教員免状をもっている人達が、直接の対象を受けさせて、試験を通して、そして物理学の教師を養成している訳です。第二年度は、化学をいたしました。第三年度は数学をやつたんです。このようにいたしまして、教員はもちろん、教員免状をもつていますから、おそらく専門は他の課目であったらと思うんですけど、そういう先生達の中から、養成をしたという事なんです。これが、アイゼンハワーのスペースギャップ、ミサイルギャップということに、端を発して生まれた

講座でございます。そのくらいにしまして、アメリカは、ソビエトに追いつけて、このことをスローガンに掲げて、科学技術教育に熱中いたしました。

ケネディの掛声

ソ連に追いつけ追いこせ

ケネディ大統領になりましてから、ケネディがまず最初に掲げたのは「ソビエトに追いつけ、追い越せ」人間が月に行くのは、アメリカが先になる。ということとを主張いたしました。これを大目標に掲げて、その目標年次を一九六〇年代中というふうに掲げた訳なのでございませう。このケネディの掛声に応じまして一九五八年に出きましたアメリカの航空宇宙局が中心になって、この宇宙開発に全力を尽くした訳であります。予算は、年々、倍増いたしました。四年ほど前から大体、年額五〇億ドルをこの航空宇宙局だけで使っている訳です。

巨大な軍事費

その外に、軍事費の中から大体二〇億ドル合計七〇億ドルが、アメリカの宇宙開発に使われている訳です。これは、最近の、今年では確か四兆何千億になりましたけれども、数年前までは日本の一年間の一般会計予算に相当する膨大な額でございませう。それだけを宇宙開発だけに投じてまいりました。この為、今日のアメリカにおける産業界では、宇宙開発産業といえますか、宇宙産業というものがもうれつに起りまして、かつての航空会

社、エンジン会社、自動車会社、エレクトロニクス関係、あるいはその他の化学関係の会社、こういうものが、この宇宙産業に集まりまして大変な栄えをみせております。

将来は宇宙開発産業時代

今後、この宇宙開発がこの状態で進んでまいりますと、おそらく将来は、軍事産業にとつて換わつて、この宇宙開発産業が中心になっていくだろうと、糸川秀雄さんに言わせると、紀元二〇〇〇年、二十一世紀には、おそらく宇宙産業以外に残らないんじゃないかというふうに極言する人さえ出てきているのでございませう。今日はどうかと申しますと、そういったことでアメリカはソビエトから遅れをとりましたけども。

ミサイルギャップの逆転

今日では大陸間弾道弾ミサイルのすべを含まれて、アメリカは完全にソビエトを抜きまして、今日はミサイルギャップは、逆にアメリカの方が上で、ソビエトの方が下であるということが、いわゆるようになりまして。

四年ほど前から大体そういうことになりました。ですから大体八年ぐらい前にミサイルギャップが、ソビエトの方が上でしたが、ここ三年ぐらいにアメリカが急速にこれに追いつきまして、その後、一挙に差を駆けつつかつあるということでありませう。

当然、そのミサイルの先につきます核

兵器ですが、これも現在はアメリカとソビエトの比率は、三対一から十対一というふうに言われております。この数字は、はっきりはわかりませんけれども、少なくとも見て、アメリカがソビエトの三倍の核兵器を持っているということでございます。

大陸間弾道弾、あるいは中距離弾道弾の数もアメリカが、完全にソビエトを抜いておりまして、今日、アメリカの大陸間弾道弾の主力武器であります、ミニットマンというロケットは、これは八、〇〇〇㎞、一〇、〇〇〇㎞飛ぶんですけれども、これが、まもなく千発になりませう。これが常時発射できる体制になっております。

ポラリス原子力潜水艦の偉力

それから、ポラリスという原子力潜水艦がございませうが、これが、四、〇〇〇㎞ぐらい飛ぶ中距離弾道弾、一メガトンぐらいの水爆を積むのですが、これが一隻で十六発持っております。これが、ほぼ四十発ございませう。これだけで、ですから六百四、五十発というものがあつた。

よく例にひかれるのですが、第二次世界大戦中、世界中で使った大砲、その他のエネルギーを、TNT火薬というもので換算いたしますと、大体四〇〇万トンから五〇〇万トンといわれております。ところが、今の水爆一発一メガトンといふのは、一〇〇万トンでございます。つまり一隻のポラリス潜水艦で、既に

その一〇〇万トンのやつを、十六発ずつ持っている訳ですから、第二次大戦に世界中の軍隊が使った、その火薬の量の三倍から四倍持っているという状態でございます。

抑止戦力

こういうふうな、今日の軍事力は、我々には想像できないくらい大きな破壊力、そういうものを備えている。そしてアメリカの方がソビエトより断然優位にあると、いうこととございませう。これが、大規模な戦争に至らない一つの抑止戦力だと言われておりますけれども、そのようにいたしまして、今日は、ミサイルギャップというものは、既にアメリカが上になったということとございませう。

実用目的の宇宙開発

それでは、スペースの方はどうかと、中開発面ではどうかと申しますと、総合的に点数をつければ、ややアメリカの方が上だと思ひます。

アメリカが一番進んでおりますのが、科学観測用の宇宙開発、ロケット、人工衛星、それから実用目的のものでございませう。特に実用目的のものは最近、ソビエトも通信衛星などあげましたけれども、テレビとか電話の中継をやる通信衛星、あるいは気象観測に使われます気象衛星のタイロスを使いまして今年中から世界中がネットワークを作る、日本でも受信機を備えまして、常時タイロスが映しました地球上の雲の写真が受信できる

ようになりす。

こういふふう非常に進んできております。それから、航海衛星というものがございまして、船や飛行機の位置を、人工衛星からくる電波を受けとめまして位置を知ることです。

昔は、星を見たり太陽を見たり、昔と言わず今でもやっておりますが、そういう天測をやっておりますが、それに変わるもの、そういうものを、まあ、実用衛星その他でございますけれども、大きくいつてこんなものです。

それから、科学研究のものはたくさんございます。アメリカの例の月の写真をとつたのもこれは一つの科学関係でございます。それからマリナーという火星の写真をとりました。これなどは、アメリカの大きな実績でございます。

ソビエトの方もコスモスという、これはいろいろな宇宙空間観測といわれておりますけれども、軍用のを含めて一〇〇個を超えて、かなりの数のコスモスを打ちあげております。昨年内に一〇一個ぐらいあげております。昨年暮れまでです。

月 旅行

それから、それでは人間が月にいく宇宙旅行の面はどうかといえますと、これも、とにかくソビエトがずっとリードしてきた訳ですね。ガガーリンが最初に飛びまして、今年の四年の二十一日でしたか、ちょうど五周年にはなるんですが、アメリカよりも一年以上早くそれが完成

した訳です。アメリカが大体、二年近く遅れました。

ところが今日、昨年アメリカが、ジェミニという二人乗りの人間衛星船を五回上げました。これによりまして、アメリカはソビエトを、完全に抜きさつたと考えられます。

ただ、抜きさつたといひましても、あつた一部の間だけでございまして、全体的に人間が月に行くということになりますと、これは、まだまだこれから解決しなければならぬ開門がたくさんございまして、その開門のメドが立たない面もございまして。果たして、だからどちらが早く月に人間を送り込むか、どうかというのは、むしろ、これからの宇宙開発にかかってくるのではないかと思ひます。

ルナー9号の打上げと難関

一番大きな難関になっておりますものには、今、ソビエトがルナー9号というものを打ちあげて、たぶん明後日あたり月に到達すると思ひますが、月に降りる方法、それから、月が人間が降りることに適しているかどうか、という問題が大きな問題でございまして、これが、非常に大きな一つの開門になっております。

月に人間を送り込む為には、非常に大きなロケットが必要なのでございましてそのロケットの開発がどういふ状態にあるか、それから、その大型のロケットを完全に打ち上げることのできる基地があるかどうか、それから、この大型ロケッ

トに乗っていく人間の医学的な面が解決されているだろうか、あるいは、月に帰ってくる為にいろいろな技術が必要なのだが、その技術はいつたいどうなっているのだろうか。そして目的の月には果たして人間を受けつけるような環境にあるところなんだろうか。このいずれもが、まだ未解決でございまして。準備は進められてはいますけれども、まだ未解決でございまして。

三、日本の宇宙開発

個体燃料と取組む日本の特色

日本の宇宙開発が、個体燃料で十年前に独自のスタートをした。V二号も手に入らなかつた日本が、液体燃料という非常に難かしい技術と取り組まないで、比較的やさしい個体燃料と取り組んだ。しかも、その個体燃料のロケットで、どんな大型の物を作つて、燃料も改良してきた。ということ、今日になってみますと、今日のロケットの主役は、どうやら個体燃料に変わりつつある。というところがいえるのでありまして、非常に安全で、安定性があつて値段も安く、発射基地も、簡単ですむという実用的なロケットとして、この個体燃料ロケットが、クローズアップされてまいりました。

フランスから日本へ申入れ

最近では、フランスが長いこと、A I という人工衛星を上げましたが、これに使つていくギヤマンという、一段目が、うまくいきませんで、これも、ケロシン

の液体燃料を使つたんですが、なかなかうまくいかないで、非常に苦心慘然として、最近では、個体燃料に切り変えるような算だんをしております。

ところが、うまくいかないとみえまして、最近、日本に日本の個体燃料を売つてくれないか、その代り、フランスが、ジャイロコパー、ジャイロですね、その技術が日本にないので、それと交換しようではないか、といつて申入れがくるくらいになりました。

もちろん、日本は断りましたけど……：そういうふうには、外国から日本にかなり、日本のロケットが注目されている。

中共も日本に注目

それから、中共が原爆を作りまして、今度は、当然ミサイル化する訳です。ロケットの開発をしきりにやっておりますが、中共は今のところ、液体燃料のミサイル、小型ミサイル開発、大きなものは開発が進んでいりますが、日本の個体燃料に、中共が、非常に注目をしている。

スパイされる日本科学

実は、日本は、国家機密がないものから、日本の東大の進歩してきたロケットに関するスパイが、世界中から日本に集つてきております。内之浦にまいりまして、秋田県の時代には、地上でエンジン进行测试するところがあるんですが、そこにまいりまして、必ず、外国のかなり重要な会社、あるいは、機関か

ら人が来ております。

たとえば、アメリカのランドコーポレーションというような、軍事化学研究をしているところ、それから、ちよつと申しあげても、オーストラリアは、宇宙開発の発射場である訳です。これは、エルドと申しまして、ヨーロッパの七つの国（オーストラリアをいれまして）が共同で大型ロケットを開発して、人工衛星を打ち上げる計画なのですが、このイギリスのロケット、ヨーロッパのエルドといひますのは三段ロケットで、一段目はイギリスが使っておりますが、そのロケットの発射場が、このオーストラリアにある人ですけれども、この、オーストラリアの大使館の書記官、それから、フランス、最近では、西ドイツが、日本のロケットを買いたい。これは、値段の点で、アメリカが、軍用に使ったのをタミたいにして、売ってしまったので、こちらにとられてしまいましたけれども……。

それから、インドネシアに昨年売りました。これは、かなり問題になりましたけど……。

その前に、ユーゴにカッパ八型というのを売りました。それから、一昨年パキスタンに、カッパ八型が、やはりこの間インドネシアに売ったものが売れそうになったところ、最後に、フランスにひっくりかえされてしまった。

今、実は、観測用のロケットを、一〇〇〇㎏ぐらいの高度に上るまでのロケットとして、非常に、日本のロケット

は優越なので、各国から、特に、後進国が買いに來てるんですが、これに切り込みをかけているのが、フランスなんです。

ロケットの商品化競争

フランスが、非常に、軍用ロケットを開発しているのですが、これも観測ロケットを作つたりしまして、これが、値段を非常に安くしちゃう訳ですね。そういうような訳で、日本が、立ち向かえないという面がある訳です。

今まで、日本のロケットが固体燃料で、非常に安く開発されるといつてきたんですが、これは、安いので、他の国は別の面から利益を勘定して、実際の値段より安く外国に売ると、いうことを始めまして、インドとパキスタンの試験施設は、日本が指導して作りました。インドネシアは、試験施設もロケットも日本から輸入したのですが、肝心のロケットは、インドは、アメリカのロケット、パキスタンはフランスのロケット、こういうふうになっておまして、今、イギリスでも大量の小型ロケットを、大量生産して安く売るといふふうになりました。観測ロケットは、今や世界で商品化しつつあるのが、実情でございます。

そういった中で、ちよつと申し落としましたが、フランスは独自で、ギヤマンという人工衛星を開発いたしましたけれども、これは、結局、中距離弾道弾を狙つておまして、軍の国防省の兵器開発本部で作つておるのです。

押えられていた西ドイツ

かつては、ドイツから生まれたロケットなのですが、今日は、日本と同じように戦後長く押えられてきた。というところで、ロケット開発は非常に遅れております。

若い日本の技術者

日本のロケットは、スペースサイエンスと申しますか、宇宙科学を研究している若い層の学者達が、非常にハッスルしてまいりまして、その人達が、ロケット技術者を、今むしろ、突き上げてきている。「自分達は、アメリカ、ビソエトは外国がやつてるけども、そういう国でやつている宇宙科学の研究よりも、自分達独自の方法でやりたいんだ。その為には、どんどん高く上がるロケットを作つてくれ。」という要望が、非常に強くなりまして、日本独自の研究も生まれておまして、比較的安いロケットを使つて、宇宙空間の観測、研究が日本で非常に進歩してまいりまして、

米ソに次いで日本が第三位

この宇宙科学の面でも、専門の学者に聞いてみますと、米・ソに次いで第三位に來つた。ということをおいておられます。垂直にあげて、だんだんだんだん高いところの地球をとりまくいろいろな状態を計る。ということが行なわれる。と同時に、そのロケットが大型になると、こんどは、横にまわれば、人工衛星

になる能力を備えてきたということ、当然、垂直に短い時間計るだけでなく、地球のまわりを回わりながら、常時地球の周囲を観測する。という学問分野の開発というものが、これから大いに進んでくるのでございましょう。

若い人たちの研究熱

最近では、若い人達（一〇〇人ぐらいいるそうですが）そういう人達のロケットの数が足りなくて、自分の研究が一年に一度くらいしか載せてもらえない。と、いつてプブプブプブ言うようになってまいりましたけれども、そのくらい今日、日本のロケット開発といひますのは、むしろ、ロケットの数が足りない。「もっと高く上げてくれ、人工衛星にしてくれ」という宇宙科学の研究者達によつて、逆に突き上げられるようになってきたということは、私達の大いに認識を改める必要があるかと思ひます。

愛国科学者日本人織田助教授

特に、最近の話題ですが、アメリカMIT、マサチューセッツ工科大学という、すぐれた大学がございまして、ここに、パーマネット・プロフェツサーをオファ一した織田さんという東京大学の助教授がいます。この人は、宇宙船の研究で非常に世界的にすぐれた人なのですが、これが今まで、アメリカの人工衛星、その他を使つて研究してきた。ところが「自分の研究がアメリカでやつていたので

は、全部アメリカに吸いとられてしま
う。もし、日本で科学衛星を上げてくれ
るなら、私は、日本へ帰ってくる」とい
うことを彼は言いました。日本のニュー
・ロケットを使つての科学衛星に、非常
に期待をして、せっかく、アメリカの M
I T の永久教授の資格を約束されながら
も、それを捨てて、東京大学の一助教授
で、日本に今度帰ってくることにしま
した。

頭脳の流出から復帰へ

こういふふうには、頭脳の流出というこ
とが、しきりに日本で言われているので
すが、こういう宇宙開発の面で、日本が
かなり無理ではあつても、独自に開発し
て、それによつて技術も、もちろん進ん
でいる。その技術が、いろいろな面では
ね返つてまいります。

日本の技術の信用度が高まると同時
に、学問研究の分野でも、流出していた
頭脳が、日本に帰ってくる。というこの
事実を、私達は知る必要があるのではな
いかと思ひます。

したがつて、日本の宇宙開発は、「金
もないにおこがましい」と、よく言わ
れておりますけど、日本人の能力の可能
性といひますか「やつて、やれるところ
までやつてみようじゃないか。」という
この感慨が、私達は、この宇宙開発の面
を通じて言うことが出来るんじゃないか
と思ひます。

理事会開催結果につき お知らせ

三月三十日十時半より県民会館第三会
議室において理事会を開催、協議が行わ
れたが、この結果について左のようにお
知らせし、各校 P T A 及び各地区毎にそ
れぞれのことにご協力方をお願いしま
す。

□負担金増額について

定数法の改正、高校教育費の増額、大
学進学難緩和のため大学増設運動等 P
連全国組織を活用して強力にすすめるた
め、本部事務局の強化、渉外費の増額等
のため、全国高 P 連負担金が増額される
ことになった。更に汽車賃、郵便料等諸
物価上昇に伴い各県とも予算も増加せざ
るを得ない情勢にあるので、昭和四十
一年度は本県においても二円の増額を予定
し、結局生徒一人当年間負担額七円とす
る案を六月の総会へ提案することに理事
会においては議決されましたのでご了承
願ひます。

□ベルマーク運動について

特殊学校の教育設備充実のため、ベル
マークを奨める運動については、来年度
はこの趣旨を全県下の高校生及び P T A
に普及徹底して支援をもとめ、推進して
成果をあげるようご協力願ひます。

□役員改選方法について

会則により役員は四月に新しく就任さ
れる各高校 P T A 会長が互選によつて役
員を互選し、総会において正式決定する
こととするのであるが、手続上各地区毎

に五月中旬頃までに左の人員を役員候補
として選出願ひます。このとりまとの
世話係として左記のように各地区の昭和
四十年年度の役員にお願いいたします。
(副会長は理事等役員候補の中から総会
において互選されることになる予定)

地区名 校 名 世話係

賀茂地区 理事一名
下田南、下田北、松崎、箱取

田方地区 理事二名
伊東、伊東商、熱海、大仁、修善寺工
菲山、田方農、三島南、三島北

沼津地区 理事二名
御殿場、同南、經野、沼津商、沼津東
同西、同北、沼津工、沼津市立

富士地区 理事一名、監事一名
吉原、吉原工、富士、富士宮東、富士
宮北、富士宮農、吉原市商

静岡地区 理事(吉原工) 中野東一
清水東、同西、同南、清水工、静岡、
同城北、静岡東、静岡農、静岡工、静岡定
静岡商、清水市商、静岡市高、同商

志摩地区 理事三名
焼津中央、同水産、藤枝東、同川根分
校、藤枝西、同北、島田、同金谷分校

島工、島商、榛原、相良
理事(島商) 土田兼雄

小笠・周智地区 理事二名
掛川東、同西、小笠農、池新田、横須
賀、森、周智農林、中遠工

磐田地区 理事二名
理事(掛川西) 石山金蔵

袋井商、佐久間、天竜林、磐田商、磐
田北、同南、磐田農、二俣
副会長(二俣) 藤森常次郎
浜松・浜名・引佐地区
理事二名、監事一名

浜松北、同西、同南、同城北上、同商
浜名、新居、引佐、氣賀、三ヶ日、浜
松市商、農業経営、浜松工
監事(浜商) 佐藤五八郎

特殊学校 理事一名
沼津工、同農、静岡岡、同農、同養護
浜松工、同農、天竜養護
理事(浜農) 矢部 清

編 集 後 記

◇会報第五号をおくりします。
今回は、吉原高生活館とベルマーク、
第3回研修記録を中心に取材し、編集
いたしました。今後各校とも挙つて
ご寄稿いただくようお願いしま
す。
◇理事会で協議いたしました役員改選の
方法については、各地区とも世話人該
当の高校側においても会合等につき何
かとお世話になることと思ひますが、
ご協力たまわりたくおねがいいたしま
す。

昭和四十一年三月三十日 印刷
昭和四十一年三月三十一日 発行

編 集 静岡市追手町一六
県民会館内

発行 静岡県公立高等学校
P T A 会長連絡会
静岡市宮ヶ崎町 志田勝次郎

印刷 株式会社神戸印刷